

霊 聲

れ い せ い

2010年5月 (第176号)

北米ホーリネス教団

OMS Holiness Church of North America

www.omsholiness.org

reisei@omsholiness.org

御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。(コリント第一の手紙2章13節)

あなたがこの国に

迎えられたのは

大倉 信

(サンディエゴ教会牧師)

NHKの大河ドラマ『竜馬伝』が話題となっています。

時は幕末、主人公の坂本竜馬は土佐藩、薩摩藩、長州藩といった地域に住む若者達と共にその激動の生涯を駆けぬけました。

彼らが暮らしていた諸藩は、どれも江戸や京都から距離を置く辺境の地でした。列強からの圧力を受け、その国政においても行き詰まりを感じていた当時の日本というものを、彼らはその地から見つめ、何人も思いもつかない方法をもって日本を変えようとしたのです。

この十年、米国に暮らす者として、日本に行く度にその変化を肌で感じていきます。先日日本に滞在していて気がつかされたことがあります。それは町のいたるところから(その時は首都圏にいたのですが)中国語が聞こえてきたということでした。

そして、それは中国人に限らず十年前と比べても明らかに今、日本国内には多くの外国人がおり、その影響がキリスト教界にまで及んでいます。

また、日本にやってくる外国人のみならず、日本人自身も今、続々と海外に出て行っています。二〇〇六年の外務省領事局調査統計によりますと一〇六万三六五九人もの日本人が海外に長期滞在し、それ以外の短期留学や旅行などの渡航者は年間一七五三万五〇〇〇人におよび、それは日本人総人口の十五パーセント以上が外国文化に触れているということになります。

先の私の訪日の目的は All Nations Returnee Conference に参加することでした。このコンファランスは二〇〇九年に始まったもので、今年の参加者は六〇〇名にも及びました。

その多くは海外在住経験者、海外で信仰をもった者、信仰が覚醒された者、今も海外で暮らす者達で、その秘めた力は今、日本国内で押しとどめることができないほどのものとなりつつあります。



美香夫人と共に

私達夫婦は一九九八年に渡米しましたが、その時には、まだこのムーブメントは考えもしないことでした。

しかし今や、これからの日本のリバイバルを祈り、考える時に、この動きは無視することのできないものとなりました。これからの私達はこの現実をしかと心に刻み、神様が私達に与えてくださっている使命というものに立つ覚悟が必要となることでしょう。

私達は否応なく、このアメリカ合衆国で、その流れの最前線に立っているのです。

私達が聖書を読みます時に、母国を追われたユダヤ人達がその国に帰還して国を復興している様を見ることができません。

彼らの信仰は常に諸外国との関わり合いによって練られ、形作られてきました。アブラハム、モーセ、ダニエル、エステル、そしてパウロ・・・、彼らは皆、複数の文化に触れ、幾つかの言語に親しみ、祖国

を外から見る特権にあずかり、それらの一つ一つを宣教の飛躍のために用いてきました。

ユダヤ人であったエステルはペルシア王、アハシユエロスの妃となりました。王宮に暮らす彼女に叔父のモルデカイは危急存亡の中にいる同胞の民、ユダヤ人のために立ち上がることを彼女に訴え、こう言いました。

「あなたは王宮にいるゆえ、すべてのユダヤ人と異なり、難を免れるだろうと思つてはならない。あなたがもし、このような時に黙っているならば、ほかの所から、助けと救いがユダヤ人のために起るでしょう。しかし、あなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう。あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったと誰が知りましょう」(エステル記 四章一三節、一四節)

私達が米国にやって来た理由と経緯は皆、異なります。

しかし、この地に導かれたことには確かに神様のご計画があったことと信じます。

今日、私達の祖国日本は色々な意味において行き詰まりを感じています。たとえ未曾有の不景気であっても、今もその物質的な豊かさは顕著ですが、重く息苦しい問題を数多く抱えています。

私達は自分で日本人として生まれることを選んで生まれてきたではありません。それを決められたのは神様であり、そのところには確かに私達に対する神様のご計画があるに違いありません

以下、この使命に対して今、備えるべき個人的具体案を記して筆を置かせていただきま



世界(日本)で起きている現状認識とそのことに対する使命の自覚。

海外在住日本人の使命を神学的に探求する。

世界に散在する日本人クリスチャン同士のネットワーク構築。

米国にある日本人教会と日本の教会とのネットワーク構築。

外から日本を見ることによる「日本」と「日本人」に対する研究。

「あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったと誰が知りましょう」

私達は神様からこの言葉を直接語られている者として、真剣にこの問いかけを受け留めていかななくてはならない時代に今、生きています。

「共にいてくださる神と人と」

「…モーセと共にいたように、あなたと共にいる…。強く、また雄々しくあれ。」

(ヨシユア 記 一章五、六節)

二〇〇八年 十二月十日

直腸癌ステージⅢaとの診断を受けました。まずは六週間の予定で化学療法・放射線療法を同時にすることになり、その後摘出手術を受ける予定が組まれました。

正直、直腸癌と伝えられた時にショックがなかったと言えは嘘になりますが、とにかく転移なしとの診断を励みに治療することに集中しましたので、悩んでいる暇はありませんでした。化学療法や放射線療法の影響も徐々に強まる中、礼拝を守ることも容易ではありませんませんでした。しかし、

苦しみや痛みで明日の説教は出来ないと思う時に、神さまは説教の言葉を与えてくださり、オリジナルの賛美の曲を与えてくださり、神さまが共にいてくださり、助けを与えてくださるということを実感しました。

そして、癌の摘出自体は成功しましたが、感染症や合併症が続き、今年の二月までに合計で手術が八回と入院が九回一二七日間というのは想像していかないことでした。最初の手術時、担当医師が教会宛に書いた手紙には、手術より二ヶ月で軽い仕事に戻れるとの予定だったのに、二ヶ月どころではなく一年以上を経て、最終の手術の予定を組むこともまだできません。

しかし、この長い闘病期間は私にとって恵みの時となりました。度重なる入院を通して、私の手と体から力が取られ自由が取られ、ベットに張り付けられたようになった時、イエスさまの十字架を思いました。着る物もその力もプラ

イドもすべてが取られて、ムチ打たれて茨の冠をかぶせられ、十字架に釘付けにされるイエスさまの苦悩と神さまご自身の痛みほんの一部を自分の体で受け留めた時、神様の臨在を強く感じました。

「わたしは有つて有る者」

(出エジプト三章一四節)
と言われた神が共にいてくださることを強く受け止めました。私が何かしたから、出来たからでなく、神が何かをしてくださったからでもなく、ただ私が居て、神が居られるそれだけで満たされてくるのです。

昨年十月の直腸再手術と人工肛門再開設は、体力的にも精神的にも弱っていた時であり、難易度の高い手術でもあり、さすがに「死」というものを強く意識しました。その時に、日本に住む息子が急遽駆けつけてくれました。息子の存在も家内の存在も、ただここに居てくれるだけで良い、それだけで嬉しいということを実感しました。そして、教

会や教団諸教会やハワイの連盟諸教会のみなさんが、ウェブを通して古い友人・知人が、個人的に励まし続けてくださる方々が、私を支えてくださいました。これほどまで多くの方に「励まされ、祈られる」ということを知ったのは初めてのことです。神が共に居てくださり、人が共に居てくださるといふことを知ることができたのは、最高の恵みであり私の力となりました。神と、そして支えてくださる皆さんに心からの感謝をささげます。



智恵子夫人と共に

(この文章は四月二日のものです。現在の状況は、中村師のブログ

http://d.hatena.ne.jp/nakamura_boku/shi/をご参照ください。)

北米日系人社会に貢献した人々

オレンジ郡教会 牧師 杉村 宰

ハーバード・ニコルソン宣教師は、一九四四年、日系二世兵士たちの特訓先ミシシッピー州キャンプ・シエルビーの訪問し、その後、国防省に強制収容所の閉鎖嘆願のために出向いた。そこでマックロイ国防次官に面会できたのだった。この千載一隅のチャンスは多くの知己を通して実現された訳だが、その時、国防次官は「世論だけが問題だ」というので、ニコルソン師は西部在住の関係者に日系人の解放嘆願の手紙を書いてくれるよう頼んだのである。それから四ヶ月もしないで十五万通の嘆願書が国防省に届いたのだった。一九四



五年二月には収容所が閉鎖となったが、彼の直接の嘆願が結果的に大きく効を奏すことになった。

それから彼はマンザナから南カリフォルニアに帰る人々の家具運搬のために、何度もマンザナに通い続けたのである。また彼らのためにホステルを準備し、仕事の斡旋をし、さらにヒルクレスト療養所、近隣の諸病院施設の訪問が彼の仕事となった。

一九四七年からはブレズレン教会主催のハイファア・プロジェクト（山羊搬送計画）とララ（アジア救援公認団体）、フレンド派そして諸教会とが共催で日本に山羊を送るという計画があり、ニコルソン師は、これに志願をしている。二〇〇頭が沖繩に運ばれた。

彼は日本人を苦しめるようなことをしたアメリカ人を赦して欲しいと、どこでも語った。翌年には、二五〇頭の山羊を日本に運んでいる。結局このプロジェクトでは、しめて五千頭の山羊を沖繩と

日本に送ることが出来たのである。その中で三度の山羊を送る船旅をした。広島では、あの恐ろしい犯罪行為を謝罪した最初のアメリカ人となり、日本では戦犯の慰問、アメリカでも日系人死刑囚の誤審の再審などに貢献をしている。

一九五〇年からはWEC（世界伝道クルセード）の計らいで日本に行った。その日本本部の設立後、サナトリウム、刑務所、ライ病施設の訪問に携わり、主に水戸を中心に養老施設の建設に携わり、一九六一年にバサデナに帰っているが、日本での滞在はじめて三五年にも及んだ。彼の日系人に対する功績に対してJACL（全米日系市民協会）は一九六三年に感謝を表している。

一九七二年からはJEMSのスタッフとなって日系人伝道に携わり、病院、老人ホームを訪問し、日系社会に貢献し続けたのである。一九八一年八月、ロサンゼルスで開かれた戦時市民転住収容に関する連邦委員会での公聴会では、八八歳のニコルソン師が三度目のガン治療の療養中に出席し、次のように立ち退きが不当であったことを証言している。

「自分ほど戦時中に強制収容さ

れた日系人に関ったアメリカ人はいない。そこで教会員と共に苦しみ、一世が犯罪人のように一まとめにされてミズーラに連れ去られて行くのに付いて行った。それから虫けらのように取り扱われた戦争犯罪人収容キャンプにも行った。転住所では日系人と一緒に寝起きし、食事をし、アリゾナでは暑さと砂嵐を経験し、ワイオミングのハート・マウンテン転住所では極度の寒さにも遭った。コロラドでは汚いジェルにも入れられ、FBIに付けねらわれたこともあった。だから自分としては日系人に対して同情できる。それだけに日系人も政府に嘆願の手紙を出したりして、政府に訴えることが必要である」

この彼の発言が収容所に入れられた日系人の賠償金獲得に大きく貢献している。

一九九三年六月パサデナ近郊アルタデナの聖ルカ病院で九一歳の生涯を閉じ、小東京の合同教会で告別式がもたれた。アメリカ人の中で、彼ほど親身になって日系人に仕えて下さった人物は他にいないであろう。私たちは彼に多大な負い目がある。

（続く）

サンタバーバラ

夏期修養会へのお招き



修養会講師 中道善次牧師

日本ホーリネス教団
茅ヶ崎教会牧師

*プロフィール

一九五九年三月十四日、京都で生まれる。一九七六年十月、高校三年生の時に、信仰告白をし、京都紫野教会にて洗礼を受ける。

一九七八年、東京聖書学院に入学。卒業後、米国にてアズサ大学とフラー神学校で学び神学修士を取得する。一九八八年帰国。一九八九年四月、茅ヶ崎教会に赴任（今年で二二年目）。現在、三つの教会の主任牧師と学生伝道のカフェの責任教会の牧師として、二人の牧師と宣教師と共に働く。二〇〇七年四月より、日本ホーリネス教団教職教団委員となる。家族構成は、妻と六人の子どもたち。

「愛の負債」を

少しでもお返ししたい

互いに愛し合うことの外は、何人にも借りがあつてはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。」

（ローマ書一三章八節）

一九八八年三月末、私ども一家は米国留学を終え、日本に帰国しました。五年間の米国滞在中、私どもはずっと北米ホーリネス教団の教会に出席いたしました。サンゲール教会（当時の名称）、LAホーリネス教会（ここで結婚式を挙げていただきました）、オレンジ郡教会（学生牧師として一年半任命を受けました）、サンファン教会（長女が誕生した場所です）の四つの教会と交わりを持たせていただきました。どの教会に行っても皆さんから愛していただき、本当に良くしていただきました。

「日本から来た見ず知らずの私たちに対して、どうしてこのようによくしてくださいのだろうか？」と、妻といつも語り合っていました。愛されてばかりの五年間でした。

特に、妻（由子）が腎臓の病気（ネフローゼ）になった時、一番その愛を強く感じました。皆様から祈っていただき、ラヴ・オフリングをいただき、「食事作りに困っているでしょう」と主日礼拝ごとにお食事を持たせてくださった方々の顔を今でも思い出します。

私どもは、返済不可能なほど大きな「愛の負債」（ローマ一三章八節）を北米ホーリネス教団の皆様にかけております。当時を知る方々は、「由子さん、元気？」と今でも妻の健康を気遣ってくださいます。日本に帰り、妻は今六人の子の母親ですが、北米の方々にとっては「昔のままの由子さん」です。

北米ホーリネス教団より、夏期修養会の講師としてのお招きをいただいた時、「少しでも恩返しができるなら」という思いで、お引き受けいたしました。

御用を通してちゃんと「恩返し」が出来るようにと願っております。しかしそれ以上に、当時の私どもを知り、祈り支えてくださり、日本に送り返して下さった方々にお会いして（二二年前ですから、天国にお帰りになった方々も多くおられますが）、

「今日があるのは皆様の愛と祈りに支えられたお陰です。ありがとうございます」と申し上げたい一心であります。

「愛の負債」を少しでも返すことが出来ればと願っております。皆様とお会いできる日を楽しみにしつつ。

教団ニュース

■ 二〇一〇年教団総会

七月九日(金) ～十日(土)

正教師会 七月八日(木)

会場・ポイントローマナザレン

大学(サンディエゴ)

■ サンタババーバラ夏期修養会

六月三〇日(水) ～三日(土)

講師 中道善次師

主題「わたしの内に力強く働く

キリストの力」

主題聖句「このために私は労苦

しており、私の内に力強く働くキ

リストの力によって闘っています

す。」(コロサイ一章二九節)

登録期間 四月一日～五月三十一日

■ ハワイ聖会

六月二六日(土) ～二七日(日)

講師 中道善次師

主題「ダビデに学ぶ人生の秘訣」

教会ニュース

■ サンタクララ教会では、一九

六九年十一月にサニーベル教

会とキャンベル教会が合併し、

サンタクララ・ホーリネス教

会が誕生して四〇年が経った。

このことを記念し、村上宣道

師をお迎えし、二〇一〇年四

月二五日に記念礼拝と愛餐会

が持たれた。

■ 四月二二、二四日。北加日語

クリスチャン聖会が日本から

村上宣道師と榊原寛師を講師

に迎え、サンロレンゾ教会で

開かれた。北加にあるキリス

ト教会日語部の超教派組織、

北加日語クリスチャン委員会

が主催した。

消息

■ 中村裕二師(ウエストオアフ

教会)は、本文にもあります

ように、自宅療養中です。引

き続きお祈りください。

■ 中島光成師は、四月四日ノ

ースカウンティ教会にて按手

礼を受けられました。おめで

とうございます。

■ 安藤秀世師。春日井福音キリ

スト教会にて奉仕が開始され

ています。

■ 玄仁師。訓子夫人が第二子を

五月二二日に出産予定です。

お祈りください。

■ 細見剛正師。二〇〇五年に完

全に引退して、今年で七年目

に入りますが、主の恵みと皆

様のお祈りの賜物で元気で過

ごしています。いつもはサン

マテオ市にあるストージ長老

教会で毎週日本語で説教、時

には英語の説教、礼典を依頼

されており。『伝道者に引

退なし』でこれからも主と教

会、失われつつある靈魂の救

いのために働きたく願ってい

ます。続いてお祈りください。

■ 大川道雄、暁子(さとこ)牧

師。東京、浜松、名古屋、そ

して 今、四国一高松に來ま

した。桜が満開です。私のマ

ンションは桜町です。五月中

には、全面的にアメリカへ帰

ることになります。皆様のお

祈りを感謝します。今年七二

歳になります。まだかなり

元気です。イースター前に一

人洗礼を受けました。

ハレルヤ!

編集室から

▼いきなり私事で恐縮だが、こ

の四月でハワイ上陸五年目とな

った。最初は驚いた庭のパパイ

ヤバナナの光景も見慣れてき

た。▼ハワイに来て直ぐに長男

が洗礼を受け、先週は長女と次

男が洗礼を受けた。この喜びを

どうしてもシェアしたい。

▼今年の修養会講師の中道先生

は、六人の子沢山。こちらでも、

霊の子供たちを沢山産み出して

いただきたい。期待しましょう。

(真)

教団所属教会

(カリフォルニア)

フリーモント教会

サンロレンゾ教会

サンタクララバレー教会

ウォルナツククリーク教会

ロサンゼルス教会

サンファナンド教会

サウスベイ教会

ウエストコビナ教会

ウエストロサンゼルス教会

オレンジ郡教会

アーバイン伝道所

ホイットピア教会

サンディエゴ教会

ノースカウンティ教会

(ハワイ)

ホノルル教会

ウエストオアフ教会

ミリラニ教会

(アリゾナ)

ツーソン教会

(詳しくは www.omsholiness.org

を参照)